

石牟礼道子

椿の海の記





椿の海の記

石牟礼道子

朝日新聞社



椿の海の記

石牟礼道子著

一九七六年十一月三十日第一刷発行
一九七七年三月三十日第五刷発行
定価——八八〇円

発行者——角田秀雄

発行所——朝日新聞社 東京・名古屋
大阪・北九州

東京都千代田区有楽町二一六一
電話〇三(二二二)〇三二(代)

印刷所——共同印刷株式会社

目次

第一章	岬
第二章	岩どの提燈
第三章	往還道 ちうかんみち
第四章	十六女郎
第五章	紐とき寒行
第六章	うつつ草紙
第七章	大廻りの塘 うまわりのとち
第八章	雪河原
第九章	出水
第十章	椿
第十一章	外の崎浦 と

あとがき

装画 秀島由己男
詩画集「彼岸花」より
装本 中島かほる

椿の海の記

ときじくの

かぐの木の実の花の香り立つ
わがふるさとの

春と夏とのあいだに

もうひとつの季節がある

——死民たちの春——

第一章 岬

春の花々があらかた散り敷いてしまうと、大地の深い匂いがむせてくる。海の香りとそれはせめぎあい、不知火海沿岸は朝あけの靄が立つ。朝陽が、そのような靄をこうこうと染めあげながらのぼり出すと、光の奥からやさしい海があらわれる。

大崎^{うきざき}ヶ鼻という岬の磯にむかってわたしは降りていた。やまももの木の根元や、高い齒菜の間から、よく肥えたわらびが伸びている。クサギ菜の芽や、タラの芽が光っている。ゆけどもゆけどもやわらかい紅色の、萌え出たばかりの樟の林の芳香が、朝のかげろうをつくり出す。

晩春の鳥の声がきこえてくる。磯が近くなつて、岩肌をあらわしてくるけもの道の草丈がぐんとひくくなり、新芽を出したつわ路の丸い葉が、岩層に散らばる模様のように広がって、潮のしづきがかかりそうな岩の上まで降りると、磯椿がまだ咲きのこっている。鳥は椿に来ていて、目白たちが多かった。ここの椿は、もう真冬から咲きはじめ、そのような岩盤の層をめぐ

らせている岬という岬をつないで、山つつじの開花までの時期を咲き連なりながら、海の縁を点綴する。そのような岬の影が、朝の海にさしていた。

「やまももの木に登るときや、山の神さんに、いただき申しやすちゅうて、ことわって登ろうぞ」父の声がずうっと耳についてくる。

やまももの梢の色の、透きとおるように天蓋をなしている中を染まりながらしばらくゆき、そこを抜けてふくらみのある風の中にはいると、もう潮っぽい風の吹く岩の上である。わたしは岩の上に膝をつき、つわ露の葉をちいさなじょうごの形につくって、磯のきわの湧水をすくって飲む。清水は口に含むとき、がつつとした岩の膚はだえをしていて、のどを通るとき、まるやかな男水おとこみずの味がする。

「みっちゃん、やまももの実ば貰うときや、必ず山の神さんにことわって貰おうぞ」

父の声がまたいう。

朝の磯の静けさを椿の花々が吸っている。ここの磯のきわの岩清水には、女水おなごみずと男水があり、ホキナジロの岩床の上に湧く水は、男水である。原生種の蜜柑が、岬のむこうの崖の岩壁の上にいっぱい生えている。その野生の蜜柑の樹のずうっと下の、岩の割れ目の水は女水で、かすかな青味を帯びて沈みこみ、それは甘くやわらかい味がした。

山の神さまの祠を越えて、深い齒朶類の打ちかぶさってくる杣道をかきわけながら、磯に登り

下りするものたちは、必ずこのようなふたつの岩清水を飲んで帰るのであった。丸くつくって柄をつけた竹の籠の中の唐^{からいも}諸や、高菜漬の葉に包んだ握り飯を食べねばならなかったし、山坂越えて登り下りするだけでものがかわいたし、潮が干き切って「干しこかしてしまふ」磯にいと、身体じゅうに潮気がしみて、さらに水が欲しくなる。天氣のいい日の磯のきわの湧水のほとりには、水呑みに使ったあとのつわ落の葉が、いつも点々と散らばっていた。

「井川ば粗末にするな。神さんのおんなはつとばい、ここにも」

孫たちが散らかすつわ落の葉を、手拭いをかぶった婆さまたちがていねいに片づける。清水の湧き出す岩の割れめや窪みのことを、年寄たちは井川と呼んでいた。深い地層の中をくぐってきであられる井戸、という意味でもあろう。清水の湧き出る岩床のつづきの、そここの大きな窪みが池のようになっていて、干き潮にとり残されたきれいな小魚たちが、窪みに生えた藻をくぐって遊んでいて、まだ渚の方に降りられない稚な児たちの相手をするのだった。

潮が満ちてきて、ひとびとが、磯のものを、布の袋につめ入れて背負ったり、竹の籠にぎっしりと入れ、その容れものから背中や袖に潮の雫をしたたらせながらひきあげると、井川は満ちてくる海の中に入るのである。

「川の神さんな、たしか、山にも登んなはつとじゃもん」

囲炉裏に、手のひらや膝をくべるようにして集ってきて、川祭の頃、年寄たちがよく話す。

「やっぱり春の彼岸の頃じゃもん」

「ほんなこつ。虫出しの雷さまの鳴らしたあと、夜さり夜さりになれば、ひゅんひゅん、ひゅんひゅん鳴いて、もうあのひとたちの団体組んで下らすとの、賑やかなもんばい」

「やっぱり春の彼岸じゃなあ、下らすとは」

「小鳴りさな聞いておれば、賑やかなもんばい。そりやもう、ひとりふたりの人数じゃなかもん、あのひとたちの声は」

川の神さま方は、山の神さまでもあつて、海からそれぞれの川の筋をのぼり、村々を区切つて流れるちいさな溝川に至りながら、田んぼの畦などを、ひゅんひゅんという声で鳴きながら、狭い谷の間をとおつてにぎやかに、山にむかつておいでになるが、春の彼岸に川を下り、秋の彼岸になると山に登んなさるという。年寄たちは声をひそめ、お通りの声に耳を澄まして小鳴り聞き、どぶろくを呑んだりだんごを食べたりして、ことなくお通りが済むよう、ちいさな祭を部落ごとに行うのである。川祭は、春の彼岸はじまりの日に、秋の彼岸は、醒めの日に定まつていて、年二回、主に女たちが主催して行うのだが、部落ぜんぶの家をまわり持ちで、その年の祭に当る家の主婦たちは、どぶろくを仕込んだり、煮メ用の里芋や芋がらや、こんにやく玉のいいところを、日常は使わずに残しておいたり、だんごやおはぎを作ろうとおもえば、盆ぼん、ささげさげという小豆の種類を、その日のためにとっておいたりするのだった。

女たちの祭の宴がたけなわになり、三味線太鼓が鳴り渡ると、部落の男たちが落ちつける筈はなく、一人寄り、二人招びにやり、ついには集り寄って底抜けの歌踊りになる。

「ああ、こんだの川祭は、えらい賑おうたなあ」

という話で、次の川祭が来るまで村の気分が保てるのだった。賑わないと、

「あつちの部落じゃ賑おうたげなが、うちの川祭は、いっちよも賑やわせる者のおらんじやつた」

と淋しがる。村のいくつものちいさな祭に、「賑やわせる役目」を、おのずからそなえている人間たちが必ずいて、その人間が、長病みの死病にでもとりつかれると、部落のものは見舞にゆく。

「ああ、あんたが来てくれんば、川祭もいっちよも賑やわん。早うようなってくれて、今度こそ、賑やわせて貰わんば」

たとえ口の見舞だけでも病人には利くという。田畑の収穫と海から揚がる最上のもので祭られて、海と山と川と暮らしが、不可分のものとしてそのように続いていた。

女たちは、川という川のぐるりに洗い場を持ち、そこに集って来ては米をとぎ、唐藪からいもを洗い、大根、菜っ葉、漬物類を洗いますぐ。茶碗や鍋釜の尻をみがき、少し下ったところで赤んぼのおむつを洗い、そのまた少し下流の、田んぼにひく水門のほとりで肥桶を洗う。川というものを神

聖視し、「三寸流れりや清の水」といって朝起きの口をも淨いでいた。

「洗いそそぎは川でせろ」

洗うとだけいわずに、そそぎとつけていうのは、浄めるという意味であつたろう。川のほとりや海のほとりの「井川」に榊の木を供え、注連縄を張って祭るのは、そのような村の心によつていた。

川の神さまがひゅんひゅん鳴いて、村々の小さな谷という谷を伝つて川に下んなはるといふ「夜さり」の雰囲気はひどく神秘的だった。わたしは年寄たちの話に息をひそめ、幼い畏怖をあらわして小鳴り聞いていた。子どもたちのそんな顔を眺めて目を細め、神さま方の賑やかな声とききとるには、まだまだ、お前どもは年が足らん、年が足りてくれば、聞えてくるもんぞと、年寄たちはいふ。いつの日にか、愛嬌を帯びた気配の神さま方の声を、きつとききとれるようになりたいとわたしは思っていた。山から谷を伝つて川に入り、そして海に入る神さま方の、もう一方の分去れは、秋の彼岸ごろまで山にとどまり、山の神さまをつとめ、次の彼岸に入れ替らず、というのである。暑さ寒さも彼岸まで、というとおり、南国だとして彼岸がくるまでは囲炉裏をたいていて、囲炉裏の煙も、御馳走のうちだと目をしばたたきながら、老婆たちは祭のお伽をする。そのような年寄たちの話のあいまにおそろおそろきいてみる。

「川の神さまは、どげんひと？」

「うん」

「こまんかひと？ ふとかひと？」

「うーん、こもうもならず、ふとうもならず」

「河童がわこな？」

「しーっ」

「山童やまわらわな？」

老婆たちは口に指を立てて首を振る。

「神さんな、見ちゃあならんと」

このような夜のためには、煙の少ないどんぐりの大木をくべてあるのだが、とくべつに肉の厚いどんぐりの木の皮が、赤い燠あつになって、耳だけになっているようなみんなの目の前でぐわらりと反りかえり、燠あつと燠あつとの間に青い炎が立つ。すると、しゃがれた優しいしわぶきの声が、えへん、えへんと納戸の奥からして、おもかさまが、

「もう、からいもの焼けたごたるばえ」

という。

「あら、めくらさまに教えられた」

婆さまたちはそういつて、燠あつの下したの灰をさしくべ用の木の枝でかきいだす。炎がくずれる灰の

下から、ふうわりとうすい皮になって焼けた紅がらいもが、三つも四つも出て来て、いい匂いがするのだった。

やまももの実が熟れるころは、梅雨のさなかが多い。齒朶の若芽が胸にも頬つぺたにもこすれて来て、濡れた山の匂いが、身体に染んでくる。松の幹から滲み出ている蠟色の脂は、とくべつの匂いを持っていた。柚道は落葉の重なりでふわふわとして、きのこがもえ出るような匂いが立ちこめている。そんな柚道の上に新しい松の葉が、年中ふりつもる。山の表土というものは天然のしとねのようにやわらかだった。

老婆たちの、口に指を当てるおまじないにもかかわらず、山の神さまというものは、川の神さまになったとき、お尻の巢をとってゆくあの人たちだとおもっていたから、山の神さまの祠のそばの、白い実の成るやまももの大木に登るときは、祠にむかって二重三重ていねいにおじぎして、足の間をすぼめながら登るのである。小枝にひっかけたちいさな花籠が、ほのかな桃いろの、白やまももの粒々で、三分ぐらい埋まったら、もう胸が早鐘をうって来て、すべり下りては逃げかえる。

原生林の突端の山なのだが、小さな女の子なので、へくそかずらや、くわくわらの蔓が、おかっぱを取ってひっぱるけもの道を、横歩きしたり這いくぐったり出来るのだった。大人のゆけぬ